

## テキストコミュニケーションを用いた国語科授業の開発

西村 尚久・黒田 裕太朗  
坂田 豊

### 1 はじめに

今日の学習者には、テキスト情報を中心とした、テキストコミュニケーション<sup>1</sup>の能力を育む必要性を痛感している。なぜなら、高度情報社会においては、メディアの発達により、映像・画像情報のやりとりも容易になったが、SNSをはじめとした、学習者に身近なメディアにおいては、依然として言語情報が主たる位置を占めている。例えば、日常生活におけるSNSを介したやりとりで、誤解が生じたり、人間関係が悪化したりすることは、今や日常的なトラブルになっている。

以上のような状況をふまえ、国語科の授業を考えたとき、テキストコミュニケーションを用いた実践の開発を行う必要性を見出すことができる。国語科における「対話的な学び」が対象とする対話相手は、「教室内の他者」、「授業者」、「教科書などの」テキストなどが考えられるが、本研究が対象としているのは、「教室内の他者」

の部分である。国語科においてこれまでの実践では、教室内での他者との意見交流や話し合いなどによってそれぞれの読みを深めるといった活動が中心になっている。その他者について考えてみると、学習者は、日常生活における人間関係などから「これは〇〇が述べた意見」という情報とともに他者の意見を受け取ることになる。そのような情報に関係なく、それぞれの意見を平等に扱い、また、一つ一つの言葉にこだわった表現活動を促すという点に本研究で目指すテキストコミュニケーションを用いた国語科授業を開発する意義がある。

本稿において具体的に明らかにしたい点は、テキストコミュニケーションを用いた実践の有効性である。有効性を検証するために、第一段階として、テキストコミュニケーションを用いた意見交流を核とした実践を開発、実践する。その後、学習者に対するアンケート調査を行い、その成果と課題を明らかにする。

## 2 テキストコミュニケーションを用いた実践に向けて

テキストコミュニケーションを用いた実践を開発するために、ICT機器を活用していきたいと考えている。なぜなら、ICTの活用をすることによって、教室内の意見を匿名で交流することが可能になるからである。本校校園では、「GIGAスクール構想」の実現に向けて、中学校において、Googleが提供する「G Suite for Education」のアプリである「Google Classroom（以下「クラスルーム」と表記）」を導入している。本稿においては、小学校段階では、紙媒体を活用したテキストコミュニケーションの実践を、中学校ではクラスルームを活用した実践を紹介する。

## 3 実践①「見方を変えて、悩みを解決しよう」 （小学校六年生）

【使用教材】「プラス思考でアドバイス」（学校図書 小学校国語上）  
【単元の概要】

言語活動として、一人一人が抱える悩みを表現し、その解決策を交流した単元である。ただし、一回目は、一人一人の名前を記入しての交流、二回目はラジオ番組と称して、名前を伏せて交流した。単元の大まかな流れは、次の通りである。

第一次 それぞれが抱えている悩みを表現し、その悩みについて解決策を交流する。（二時間）

事前課題 ラジオ番組に投稿するという設定で、匿名で悩みを書く。  
第二次 ズームを活用したラジオ番組の中で、リスナーとして悩みを解決するためのアドバイスを交流する。（二時間）

第三次 二つの交流を比較し、それぞれの良さとして課題を考える。（一時間）

単元の構成として、悩み相談を通した二つの交流方法を比較することで、「教室内の他者」の影響を良さとして整理して考えることができるように工夫した。また、テキストコミュニケーションの良さについて実感を伴った理解ができるように、事前課題の中から、発達段階を捉えた共通的な悩み、クラスの現状などの悩みを優先し、自己の悩みに対する多様な見方に出合えるよう配慮した。

### 【学習者の反応】

二つの交流を比較すると、質問内容に大きな違いが見られた。「教室内の他者を意識した交流」では、ある女児から「はずかしいけれど、本音は言いたくない」とあったように、ほとんどの悩みは、自己の内面に影響がないものだった。（例えば、「忘れ物が多いのだけど、どうしたら良いでしょうか」「勉強しようとしても、すぐにゲームやスポーツなど他のことをやってしまう」など）しかし、「教室内の他者が排除された交流」においては、「人間関係の悩み（親、兄弟、友達、教師などに対する）」や教室内の問題、自分の性格の悩みなど、内面の深い部分に関わる内容が増えた。

第二次では、それらの悩みを中心に取り上げること、学習者にとって切実感のある課題となり、自分事として真剣に自分の考えを書く姿があった。学習の振り返りを見ると、「一回目と二回目の悩み相談でこの学習をして、本当に良かった。今の私たちにとってぴったりの学習だと思う。」「もっと交流したい。」など前向きな発言が多く見られた。

次の表は、単元後に学習者たちが整理したそれぞれのコミュニケーションの良さとして課題である。

表1 コミュニケーションの良さと課題

<p>良さ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手にあった答えを考えることができる。</li> <li>・誰がどんな考えをもっているか分かりやすい。</li> <li>・相手に伝えたことが分かっているかどうか確認できる。</li> </ul>	<p>「教室内の他者を意識した交流」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達関係を気にしなくて良いので、自分の悩みを本音で相談できるし、悩みについて自分の考えを伝えることができる。</li> <li>・みんなの前では言いにくいことを普段は使わない言葉を使って表現できる。深刻なことも…</li> <li>・緊張せずに自分の考えが言える。(安心感)</li> </ul>
<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のことが知られるので、恥ずかしい。</li> <li>・周りの目が気になって、</li> </ul>	<p>「教室内の他者が排除された交流」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・悪いことが書かれる心配がある。</li> <li>・相手に合った質問ができ</li> </ul>

本当のことが言えない。

ない。

・本当に思ってくれているのか、分からない。

【単元の成果と課題】

今回の実践では、学習者が日常的なコミュニケーション場面において、他者を意識して発言していること（あるいはしていないこと）に自覚的になることができた。加えて、テキストコミュニケーションとの違いを明確にし、その良さや課題を整理することができた。これらは、人や場面に応じて言語を扱う確かな力につながっていくだろう。

学習者が相手を設置した上での関わりを楽しんでいる所も今回の単元では、明らかになった。本当に悩みが解決されたのか、顔の見えにくいコミュニケーションでは、そのことまではつかみきれないなどの意見もあった。今後の課題として、それぞれのコミュニケーションの良さを自覚し、あえて匿名で書いてもらうなど意図的に使い分ける学習者の育成を図る実践を行っていくことが挙げられる。

4 実践②「短歌の交流会をしよう」(中学校2年生)

【使用教材】「短歌十五首」(学校図書 中学校国語2)

【単元の概要】

言語活動として、短歌の創作および交流を設定した単元である。

単元の大まかな流れは、次の通りである。

事前課題 短歌十五首を読み、「一番気に入った短歌とその理由」を「クラスルーム」に投稿しておく。

第一次 それぞれの短歌からイメージした情景を交流し、読みを深め、「一番気に入った短歌と、どのような読みの深まりがあったか」を再度「クラスルーム」に投稿する。投稿された内容について意見を交流する。(三時間)

第二次 風景や心情などテーマを決めて短歌を創作する。「クラスルーム」に投稿する。(二時間)

第三次 「クラスルーム」に投稿された短歌を鑑賞し、気に入った短歌と、良かったところを交流しあう。(二時間)

単元全体を通して、オンラインと教室を往還しながら学習を進める構成とした。オンラインで収集した「短歌十五首のうちどれが一番気に入ったか」というデータや、「クラスルーム」に投稿した短歌は、それぞれ匿名・ペンネームで提示し、学習者の人間関係によるバイアスが極力かからないように配慮した。

### 【学習者の反応】

事前課題では、「のぼり坂のペダル踏みつつ子は叫ぶ『まっすぐ?』、そっだ、どんどんのぼれ」(佐佐木幸綱)が一番気に入った学習者が、35.6%と一番多く、「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」(栗木京子)が20.5%と二番目に多かった。この二首が、気に入った短歌の50%以上を占めた。

授業で、短歌からイメージした情景を交流した後、「一番気に入った短歌と、どのような読みの深まりがあったか」を「クラスルーム」に投稿させたところ、佐佐木幸綱は22.1%、栗木京子は23.4%と順番が入れ替わり、この二首が気に入った短歌に占める割合も減少した。もともと学習者に人気だったこの二首は、比較的平易な表現であるため、初読の段階でも良さが理解できたものと考えられる。二回目の結果から、第一次で読みを深めたことにより、別の短歌の良さも分かった学習者がいたことが分かる。

以上のような活動を通して、歌人の作品を読み味わったうえで、短歌の創作および交流を行った。

創作は、図1の「Google フォーム」(以下「フォーム」と表記)で行い、教員が作品一覧を作成して、学習者に提示した。図1 創作短歌の入力フォーム

このように、作品についての匿名性を担保した状態で、どの作品がよいと思うか、どんなところがよいと思うかを交流させた。次に示すのは、この活動を終えての学習者の反応の一部である。

・比喩や体言止めなどの表現技法を使っている短歌は素敵だと思いました。

創作短歌

こちらのフォームに提出してください。

創作した短歌を書いてください。(一回目)

回答を入力

創作した短歌を書いてください。(二回目)

回答を入力

ペンネームを書いてください。

回答を入力

送信

宿題におわれていたり、部活のことを詠んだ短歌は身近なので共感できたし面白かったです。

・情景や人の表現を比喻で表すと読む人が納得いく文になることが分かった。

・部活や授業中、家のなか、公園やグラウンドなど、様々な場所のことを読んでいる歌があった。また、みんなと一緒に頑張っているときや、一人でいるときなど、様々な場面のことを読んでいる歌があった。それらは、とても共感できたり少し笑ってしまう歌があって、読んでいて楽しく、心温まった。授業で、みんなの意見や言葉に対するイメージが分かったため、はじめに作った短歌を推敲して、良い短歌ができたと思う。

#### 【単元の成果と課題】

中学生の傾向として、周りの目を気にするあまり、自分が好きなものを実直に述べることができなかったり、自分の思いを表現することに自信がもてなかったりすることがある。

オンラインを活用して、匿名性を担保することで、「この短歌が好きだ」と述べたり、自分の短歌を表現したりすることに対する抵抗感が、ある程度、減らせたのではないかと考えている。

今後の課題として、オンラインだと、タイピングなどのスキルが身についていないと、十分に表現が出来ない生徒がいる点や、オンラインによる匿名性の担保が、どのぐらい表現に対する心理的抵抗を低減できるのか明らかでない点がある。今後の実践で、検証していきたい。

## 5 実践③「テキストコミュニケーションで『最後の一句』を読み解こう」(中学校3年生)

【使用教材】「最後の一句」(森鷗外)

【単元の概要】

オンライン上での匿名での議論を実施した単元である。単元の大まかな流れは以下の通りである。

第一次 「最後の一句」を読み、読み深めるための「課題」を設定する。(二時間)

第二次 「課題」に対して解答し、その解答についてオンライン上で議論する。(六時間)

第三次 教師から出題される課題に解答する。(三時間)

第四次 単元のまとめと振り返り。(一時間)

第一次では、「最後の一句」を読み、それぞれが作品を読み深めるための「課題」を設定した<sup>3)</sup>。作成した「課題」は「フォーム」で収集し、「課題」の作成者が分からない形で学習者に配付した。

第二次では、配付した課題一覧表(表2)より、自由に「課題」を選択した上で「フォーム」に解答を入力させた(図2)。その後、それぞれの解答に対する「質問・意見」(図3)や、質問・意見に対する「返答」、返答に対する「コメント」といった形で学習者の意見を入力させ、それを整理した一覧表(表3)を毎時間配付すること

図2 解答入力フォーム

「最後の一句」課題解答入力フォーム	
*注 「最後の一句」課題の解答フォームです。	
解答する課題の番号を記入してください。*	回答入力
課題への解答を入力してください。*	回答入力
解答する中で新たな課題が生まれた場合はこちらへ入力してください。	回答入力
課題に関して資料に質問がある場合はこちらへ入力してください。	回答入力

図3 質問・意見入力フォーム

「最後の一句」解答への質問・意見	
*注	
質問・意見のある課題の番号を記入してください。*	回答入力
質問・意見のある解答の番号を記入してください。*	回答入力
解答への質問・意見を記入してください。*	回答入力
資料に質問がある場合はこちらへ入力してください。	回答入力

で、匿名での議論を行った。また、第二次では、「課題」に答える中で新たに「課題」が生まれると考えられたため、「課題」は常時募集するという形を取ることにした。最終的に作成された課題は一四一種類となった。

第三次では、テキストコミュニケーションを用いた議論を経た状態で、教師から出題される課題に解答をさせた。教師側からの課題は「いちの最後の一句には反抗の意図はあったのだろうか」といった、学習者の議論の中で意見が分かれていたものを再度問う形で設定した。解答の際には、それまでの議論が配付資料の中に記録として残っているものを参考にさせた。

第四次では、ここまでの議論を踏まえ、森鷗外の創作意図を考えると、いくつかの課題を設定した。これは、様々な問いに答える中で広がっていった学習者の作品解釈を整理させる目的で設定したものである。

## 【学習者の反応】

単元終了後、テキストコミュニケーションに関するアンケート調査を「フォーム」を用いて行った。質問項目は、①「テキストコミュニケーションを用いた国語科の授業は楽しいかどうか」、②「テキストコミュニケーションを用いた国語科の授業は難しいかどうか」、③「テキストコミュニケーションを用いた国語科の授業は国語の力が身につくかどうか」、④「今後もテキストコミュニケーションの授業を受けてみたいかどうか」、⑤「テキストコミュニケーションを活用した国語科の授業についての感想」、⑥「テキストコミュニケーションを用いた授業で改善すべきこと」の六つである。①～④の質問に関しては、五件法で問い、①～③は回答の理由を入力させた。

質問①に関しては、肯定的回答が70%であり、その理由として、「匿名であるからこそ、気軽にその人と意見を言い合ったり質問しあったりできるから。また、発表するという形だと、どうしても発言する人が決まってしまうたり、発言するのが苦手な人からすると、自分の意見を述べられなくなるため、テキストコミュニケーションは素晴らしいと思う。」などと、匿名でのやり取りによって気軽に意見が交流できるという点が多く挙げられた。一方で、否定的な意見として、「直接話すことができないのでうまく話すことができなくて、思うような回答がもらえなかったり、質問が一方通行で返答が返ってこないこともあるので、少し不便でした。」といったように、思うようにコミュニケーションが成立しないという意見が見られた。

質問②に関しては、66.7%の学習者が「難しい」と回答している。その原因として、その原因として、「どんな質問が出たか、どんな解

表2 課題一覧表

課題番号	課題	
いちに関わる課題	1	いち、死ぬのが怖くなかったのか
	2	なぜいちはそのままでして父だけ助けたかったのか
	3	なぜいち、小さい弟や妹まで死なせようとしたのか
	4	なぜいち、姉弟に確認もしていないのに父の代わりに殺すように願ひ書に書いたのか
	5	全体から、いちが強情な少女と思われているようだが、なぜそのような少女になったのか
	6	なぜいち、殺してほしくない長太郎を連れていったのか
	7	なぜいち、一人で願ひ書をかいたのか（親に相談せずに）
	8	父は死んではいけなくと強く考えているのになぜ長太郎以外の兄弟に死ぬのをほぼ強制しているのか
	9	いち、死ぬことに対してどのような思いを持っていたのか
	10	なぜいち、桂屋太郎兵衛を助けるかわりに自分だけではなく、養子である長太郎も殺すように頼んだのか
	11	いちがお父さんに死刑になることを聞いて悲しまなかったのか
	12	いち、なぜ長太郎に何をしに行くかを明確に伝えなかったのか
	13	なぜいち、常に冷静でいれるのか
	14	いちはおしおきを子供四人でうけて父親をたすけてもらえるとおもったのか
	15	いち、長太郎兵衛や自分たち子どもが助かることを最初から計算していたのか
	16	いち、あまりにもおちついていて自分たちがころされないとそうていしていたのか。そうていしていたならどこまでそうていしていたのか
	17	いちの自分が考えた作戦がうまくいくという自信はどこからおきているのか
	18	いちが役人たちに取り調べを受けているとき、冷やかな鋭い目になったのはなぜか
	19	なぜいち、幕府にひにくをいうような最後の一句をいひはなったのか？
佐佐および役人に関わる課題	20	なぜお奉行様たちは、いちの（子ども）の話を考えようという考えにいたったのか
	21	なぜ佐佐は願ひ書を大人が書いたと思ったのか
	22	とくの返事がないまま初五郎に話をふったのはなぜか
	23	書院の人々はなぜ知らないうちにほほえんだのか
	24	なぜ取り調べ役は、もう一度「死んでもよいか」と確認したのか
	25	なぜ佐佐はいちが言った「お上のことには間違いはございますまいから」と言ったことに非常におどろき、ひどく憎んだのか
	26	佐佐の憎悪を帯びた驚異の目はいちへのしつとなのか。違うなら何なのか
	27	佐佐の憎悪は最後の一句の例に対してか
	28	非常におどろいてひどく憎んだのになぜいちに言おうとしなかったのか
	29	いちが「お上のことにはまちがいがございますまいから」とささやいたとき佐佐は取り調べやくにどんなことをささやいたのか
	30	役人の人がいちを「情のこわい娘」「変な小娘」と呼ぶのはなぜか

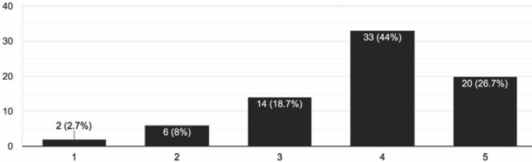
表3 配付された学習者の意見一覧

課題 番号	解答 番号	質問意 見番号	返答 番号	返答					
1	1	1	1	いちが死ぬのが怖くて兄弟も一緒にと捉えるのなら、それはいちが死ぬのが怖くないのかという質問だからあなた自身怖いと思っているという答えが出てるのではないですか。 兄弟の命の重さは重いと思っているからこそ、父の命を救えるのでは？命を救うために命をかけているのなら、それなりに大切と思ってないと思いませんか？ もし、兄弟の命を軽く見ているのなら、父の命を軽く見ているということと一緒ですよ？					
	3	3	2	6～7歳くらいの子供の大半が死について理解できていると書いてある <a href="https://allabout.co.jp/gm/gc/442413/">https://allabout.co.jp/gm/gc/442413/</a> つまりそれぞれに感じ方が違ったとしても理解しているとおもう					
				7	3	死ぬという感覚があるから父を助けようとしたのではないのでしょうか。			
						9	4	「そもそも生きている限り死を感じることはないでしょうし」ということは死ぬという感覚がないということではないのでしょうか。 死がどういうことかわからない（＝死の感覚がない）ということが死ぬのが怖くないということではないのでしょうか。	
	6	10	5	5	分かりました。ご意見を参考にさせていただきます。				
					12	6	ぬしです。そこはどこから読み取れますか具体的に		
	11	13	7	7	主です。自分も実は最初そう思いました。しかし別の目的を考えても自分はこれしか思いうかびませんでした。あなたに言っている他の目的は何か具体的をお願いします。				
					15	8	『それはわからない』ということはこの本文の流れだと死ぬか助かるかわからないということだと思うのですが死ぬか助かるかわからないので死ぬ覚悟（＝死ぬ気）はあるということではないのでしょうか？？？		
							16	9	この回答の死ぬ気がないというのは、いちが本文の最後のページに書いてある結果（太郎兵衛もいちたちも死んでいない）が予想できていたということではないのでしょうか。
									10
	11	11	11	11	願ひ書の内容は父を殺す代わりにいちたちを殺してくださいという内容なのではないですか。				
2	16	29	12	これは意見じゃなくて疑問です。					
				30	13	読み取ったページと行は書いてありますよ。			
						31	14	夜中に女房が裁縫をすると初五郎やとくが目を覚ますため子供たち全員が女房を重要視していないわけではない。	
3	26	37	15	挑発をしてまで父親の無事を願うこと					
				33	41	16	死にたくない＝父を助けたくない、というのは違うのでは？死にたくないのは父を助けたくないのであれば、とくと初五郎以外はみんな死にたいと思っているのか？		
7	60	57	17	「命に軽い重いはない」とありますが、いちが父一人の命を救うには五人（はじめは四人）の命を差し出す必要があると考えていると思います。もしくは、それほど父の犯した罪が重いと受け取っているため、その罪を自分たちの命で償おうとしているのだと思います。誤解させてすみませんでした。					



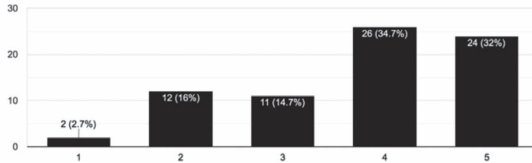
### 質問①への回答（回答者75名）

質問1 テキストコミュニケーションを用いた国語科の授業は楽しい（5段階で評価してください）  
75件の回答



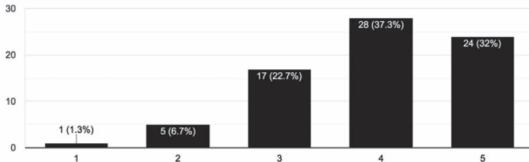
### 質問②への回答（回答者75名）

質問2 テキストコミュニケーションを用いた国語科の授業は難しい（5段階で評価してください）  
75件の回答



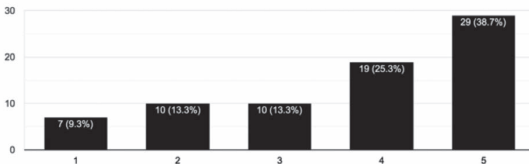
### 質問③への回答（回答者75名）

質問3 テキストコミュニケーションを用いた国語...きそうだと感じる（5段階で評価してください）  
75件の回答



### 質問④への回答（回答者75名）

質問4 今後もテキストコミュニケーションを用い...業を受けてみたい（5段階で評価してください）  
75件の回答



答が出たか、どんな返答が出たかなど情報量が多すぎるから。もう少し整理しやすい環境を整えたら難易度は下がると思う。」といったように、学習者に与えた情報が膨大であったことが挙げられた。

質問③に関しては、69.3%の学習者が「国語の力が身につく」と回答している。その理由として、「相手に誤解を起こさせないために、適切な表現を用いる必要がある」といった理由があり、このように授業をすることに よって、国語力が身につくと考えました。」といった、話すのではない

く、文字を入力しなくてはならないために表現を推敲する必要性を理由に挙げるものや、「つくと思います。回答全部が全部正しいかといえそうではないので、自分に必要なことを選択して、かつ自分ももっと知りたいことを考え直す、これを繰り返すので、インプットとアウトプットを繰り返してその中で、自分を表現する、自分の意見を改善していくことにつながるのでは、国語の力がつくと思います。」といった、情報の取捨選択を理由に挙げるものがみられた。ま

た、「国語の本質に沿っていると判断したから。人によって意見を判断するのは本当に正しいことではない。文章のみと向き合うことができる。」といった、匿名性を理由にする意見も見られた。

質問④に関しては、64%の学習者が肯定的な評価をする一方で、22.6%の学習者が否定的な評価をしている。

#### 【成果と課題】

成果としては、テキストコミュニケーションを活用した学習により、学習者同士の人間関係に関わらず率直な意見を交流できたことが挙げられる。教室内では発言の少ない生徒の意見や、少数意見が一覧表に示されることで、様々な意見に触れることができた。

一方で、課題としては、教室内で起こっている全て（本単元では二クラスで実践したものの二クラス分）の意見が一覧表に示されていくので、情報量が膨大になるといった事が挙げられる。これは、「一覧表が見づらい」といった意見が多数見られたことから明らかである。普段の授業の中では、自分の耳に入っていない情報も含め、全てが示されるからこそ課題であると言える。また、匿名によるテキストのみのコミュニケーションであるので、お互いが意図しない形で煽りとも取れる意見になってしまうなど、トラブルの種になりかねない事例が多数見られた。これは、テキストコミュニケーションが話し手の表情や抑揚、動作といったノンバーバルな情報を欠いたものであることに起因するものである。この点に関しては、今後実践を重ねていく中で、改善を図っていきたい。

## 6 テキストコミュニケーションの効果と今後の課題

小・中学校における実践から、テキストコミュニケーションを導入した効果及び課題を整理する。

各実践の中で共通した効果として挙げられたのは、テキストコミュニケーションにおける「匿名性」が学習者の心理的負担を軽減し、発言しやすい環境を作ることができるといった点である。また、「テキスト」によるコミュニケーションなので、誤解のないように、各自が表現内容を推敲する必要に迫られるといった点も効果の一つと言って良い。

課題としては、ノンバーバルな情報が欠落する事によって起こるトラブルの可能性をもつ事が挙げられる。また、本稿において実践されている単元は、学習者の意見を即座に他の学習者に共有するものではないため、コミュニケーションに非常に時間がかかるといった点も課題となるだろう。

## 7 おわりに

本研究は、広島大学における「令和二年度学部附属学校共同研究プロジェクト」によるものである。本稿において紹介した実践は、校内・教室内のICT環境を整えながら進めているものである。よってGIGAスクール構想に関わる環境整備とともに、実践は開

発されている。研究初年度となる本年度は、教室内において各学習者がタブレット端末を持っていない状態での実践であった。研究二年目となる令和三年度は、学校に配備されるタブレット端末を活用し、異学年・異校種でのテキストコミュニケーションによる交流を核とした実践を開発していきたいと考えている。

## 注

1 本研究における「テキストコミュニケーション」とは、相手が見えない文字のやりとりを用いたコミュニケーションを指す。

2 中学校では、クラスルーム上で毎日の健康観察を行い、各教科において課題の配付、質問の受付などを行っている。

3 本校では、学習者が文章を読み深めるための「問い」を作成し、それらの「問い」に答える中で読みを深める「課題探究型」の学習指導を行っている。「課題探究型学習指導」については、西村(二〇一八)「中学校国語科における課題探究型学習指導―『握手』(中3)を用いて―」にまとめている。

## 参考引用文献

- 野中潤編著(二〇一九)『学びの質を高める！ICTで変える国語授業基礎スキル&活用ガイドブック』明治図書
- 堀田龍也・為田裕行・稲垣忠・佐藤靖泰・安藤明伸(二〇二〇)『学校アップデート情報化に対応した整備のための手引き』さくら社
- 『国語教育』編集部編(二〇二〇)『with コロナの国語授業づくり』明治図書